

金沢方式による言語指導を受けた聴覚障害児・者の言語性知能

著者	小林 智子
著者別名	Kobayashi, Tomoko
雑誌名	博士学位論文要旨 論文内容の要旨および論文審査結果の要旨 / 金沢大学大学院医学研究科
巻	平成18年7月
ページ	31-31
発行年	2006-07-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/14711

学位授与番号	甲第 1742 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 22 日
氏 名	小林 智子
学位論文題目	金沢方式による言語指導を受けた聴覚障害児・者の言語性知能

論文審査委員	主 査 教 授 古川 侑
	副 査 教 授 越野 好文
	山田 正仁

内容の要旨及び審査の結果の要旨

金沢大学医学部附属病院では過去 30 年にわたり、聴覚障害児によく用いられている補聴器を装着して指導を行う聴覚口話法に加えて、指導の早期から文字言語や手指法を導入する金沢方式で聴覚障害児の言語指導を行ってきた。今回、金沢方式で指導を受けた聴覚障害児・者の言語性知能について、健聴児・者で一般的に用いられるウェクスラー知能検査を用いて良聴耳平均聴力レベル（以下平均聴力レベル）別、指導開始年齢別に分けて検討した。

対象は、金沢大学医学部附属病院耳鼻咽喉科で感音性難聴と診断され、同科言語外来で就学まで継続して金沢方式による言語指導を受けた重複障害児などを除く聴覚障害児・者で、平成 16 年の時点で 9 歳以上の 30 名（男性 10 名、女性 20 名）である。方法は、言語性知能を測定する方法として、17 歳未満は WISC-III、17 歳以上は WAIS-R の言語性知能（以下 VIQ）と動作性知能（以下 PIQ）を用いた。合わせて、ST 2 名による会話明瞭度の評価も行い、以下の結果が得られた。1. 対象児・者の 30 名中 26 名（86.7%）は、口頭での回答が可能であり、残り 4 名は筆談で施行した。30 名全員のウェクスラー知能検査の中央値は VIQ が 94、PIQ が 111、全検査（以下 FIQ）が 101 であった。24 名（80%）が VIQ 85 以上の言語性知能を有していた。2. 平均聴力レベルで 90dB 未満群（14 名）と 90dB 以上群（16 名）の 2 群間で、中央値は VIQ がそれぞれ 94 と 94.5、PIQ がそれぞれ、109 と 113、FIQ がそれぞれ 102 と 99 で聴力レベルによる有意差はなかった。3. 指導開始年齢別では、0 歳代、1 歳代、2 歳代、3 歳以上の各群で中央値の VIQ、PIQ、FIQ には有意差はなかった。4. ST 2 名による会話明瞭度の評価では、93.3%の一致度であった。

以上の成績は、文字言語や手指法の早期導入を行う金沢方式は、聴覚障害児の言語性知能を促進する言語指導法として効果的であることを示すものである。

本研究は聴覚障害児・者の言語力を長期的に、しかも暦年齢が 9 歳を越える対象児・者で追跡検討を加えた内外ではじめての研究であり、しかも聴覚障害児・者でも高い言語性知能を獲得することが可能であることを示した点で、音声言語学に貢献する価値ある論文として評価された。